



……東日本大震災から4年……

## 映画『日本と原発』を観て

3月12日、東京都練馬区のギャラリーで行われた上映会にて『日本と原発』を鑑賞しました。この映画は、弁護士の河合弘之氏と海渡雄一氏と訴訟を共に闘う木村結氏が多くの関係者と識者らに取材し、現地での情報収集や報道資料等をもとに“エネルギー政策のウソと真実”を追求したドキュメンタリーです。3.11から4年。会員の5人が、それぞれ当時を思い出し、将来を展望して映画の感想を記しました。

### ■「当面原発維持派」に観てもらいたい

今回の福島原発事故と原発そのものを多角的に検証し、しかも、そこでの人々の苦悩がリアルに描かれ、反原発の映画のなかでも、説得力のある作品で、多くの人たちの協力のもとに製作されたに違いないと思った。実際、原発を語るうえで欠かせない専門家が多数登場し、説得力のある解説を展開する。

原発がなぜいけないのか。福島原発の事故の深刻度、広範囲にわたる汚染、避難生活を余儀なくされている人々、自殺に追い込まれた家族を失った遺族、原発の事故がなければ救われた命、救えなかった人々の無念さなど、現実起きたこと、今も変わらず起きつづけている惨状や人々の苦痛など、くまなく網羅されているのではないかと。

「想定外」の津波がなければ、事故は起きなかったのか。詳しい事故原因は不明であるが、津波がなくても、原子炉事故は起きた可能性が高いと推測できる。

火山地帯の日本列島に原発を作った愚かさは世界を俯瞰すると一目でわかる。

日本では無理だとしても、地盤が強固で地震のない地域ならいいのか。「トイレのないマンション」といわれる原発の放射性廃棄物の処理問題。トイレどころではない。

原発先進国といわれる米国、フランスなども開発をあきらめた高速増殖炉もんじゅや事故続きの六ヶ所再処理工場を中止できない。

そんな映画の中でのユーモアある河合弘之弁護士と海渡雄一弁護士のやり取りは、心を和ませる。ホワ

イトボードを使った河合弘之弁護士の独特の語りもわかりやすい。

原発がなくても、エネルギーが足りていること、代替エネルギーとしての自然エネルギーの現状と未来予測の現実的な明るい見通しや省エネ対策の向上を明らかにし、原発推進派の主張はことごとく論破している。

原発運転差止訴訟を戦い、勝訴を勝ち取った両弁護士は、その意義を語る。安倍政権の原発推進を国会で止めることは難しいが、司法では可能と言える。それは長年、原発運転差止訴訟に取り組んできた海渡弁護士はじめ多くの原告や支援者の努力とともに、3.11という重い事実によってもたらされた。最高裁は、結果的に原発の拡大に手を貸し、3.11を招いたことを自覚し、今後の裁判に当たってほしい。

最後に河合弁護士が語るように、この映画を観て、感じたことを人に伝え、自分のできることを考えることが、生きている国民一人ひとりの役割だろう。(T.S)

### ■一人ひとりを忘れない

津波と原発事故をあつかった映画はこれまでに何本か観たが、そのうち一番抑制的な作品だった。意図的に意見を誘導したり、党派性が見え隠れしない。早急に結論を求めることもない。冒頭に「この映画を議論の材料としてほしい」旨の断りが流れるが、それがこの映画のコンセプトなのだろう。

そんな中で印象に残ったのが、福島県浪江町請戸

漁港の被災直後の話だった。日没のためやむなく打ち切られた被災者救助は、福島第一原発事故発生による緊急避難のため、朝が来ても再開されなかった。浜のそここからものを叩く音、車のクラクション、うめき声が聴こえたという。捜査が再開されたのは1ヶ月が過ぎてから。放射線量が高くないことを、無断で取材に入ったフリーカメラマンが公表、のちにこの地域は事故当初からあまり線量が高くなかったことが判明する。

2015年3月現在の行方不明者は2584人、この中に請戸の人はいるだろうか。淡々と進むストーリーは、顔の見えない、救われなかった人々を時折生々しく浮かび上がらせる。被災者や死者、行方不明者一人ひとりの、あったはずの生を想像することが、繰り返さない、忘れないための唯一の手段に思えた。

(M.Y.)

## ■映画の力で脱原発を説く

日本に原発は必要ない。その主張を率直に、そして力強く鑑賞者に訴えかけてくる映画、それが『日本と原発』である。この映画のチラシ広告を手にとると、「これ1本で原発を取り巻くすべての問題を提起します」というフレーズがパッと目に入ってくる。その文言通り、この映画は、ありとあらゆる手法で「日本に原発は必要ない」と説き伏せてくる。浪江町の馬場町長をはじめとして福島第一原発事故で被害に遭われた住民の方々へのインタビューや、国内外問わず原発研究における第一線の専門家へのインタビューを交えて多角的に原発を検証する内容も然ることながら、映像や音楽で魅せる“映画力”も素晴らしかった。悲惨な映像や衝撃的な映像を多用しているわけではなく、後からじわじわと臉に焼付いてくるようなシーンが多かったように思う。この映画を観てから、天気予報などで日本列島の地図を見る度に、原発の所在地と活断層とを照合させて原発の危険性を表していた映像が頭の中を過ぎるようになった。今秋、紅葉を見れば、きっと立ち入りが禁止された福島の子の燃え盛るような晩秋の美しさを思い出すことだろう。「HIROSHIMA」で話題となった作曲家・新垣隆氏の曲に乗せてエンドロールで映し出される日本国内の54基の原発。新垣氏らしいサッドネスに満ちた曲調に合わせたその一基一基の撮り方へのこだわりがこの映画の一貫性と完成度の高さを感じた。

この映画を観た後で、原発の存在に少しも疑問を持たない人はおそらくいないのではないだろうか。そう言っても、決して過言ではない。鑑賞者の心にこれでもかと脱原発の精神を刻み込もうとする強烈なパワーに、この映画を作った河合弘之弁護士、海渡雄一弁護士、木村結氏の執念を感じた。その執念は、原発訴訟の第一人者としての責任感から生まれるものなのか。彼らの原発訴訟に対する熱き思いと苦難の日々の結晶がまさにこの『日本と原発』という映画であるといえよう。

この映画を観終わった直後の大半の人の脳裏には2011年の記憶がフラッシュバックすることだろう。私も鑑賞後、2011年3月11日から数日間の記憶をまるで昨日のここのように思い出していた。自衛隊のヘリコプターが福島第一原発3号機の上空から海水を投下するシーンを久しぶりに見て、当時、手に汗握りながら今後の行く末を案じていたことを思い出した。今、改めてあの映像を冷静に見られるようになって強く思うことは、あのような極限的な危機状態は将来に渡っても二度とこの日本であってはならないということだ。それは、言い換えるならば「日本に原発は必要ない」ということである。将来の日本がより賢明な国家であるようにとの願いを込めて、この『日本と原発』という映画を賞賛したい。

(H.O)

## ■あれから4年～これからを考える

映画の冒頭、大きな地震と、凄まじい勢いで人や町を呑み込んでいく津波の映像が流れる。いつ見ても、何度見ても恐ろしい。映像の中で必死に逃げようとする人たちに「早く逃げて！早く！」と思わず心の中で叫んでしまう。2011年3月11日当日を思い出し、その日の自分、その後の自分、そして今の自分について改めて考えさせられる映画だった。さて、これからは何をすべきなんだろう、と。

監督の河合弘之弁護士は、日本と原発について、福島の被災者、被災者遺族はじめ、強く生き進もうとする当事者たちにインタビューしている。また、原発そのものについて、人災としての原発事故について、各方面・国内外の学者にも話を聞き、取材した人たちや電力会社の実態を客観的に調査しており、いかに原発事故により人びとが日常を失い、死と隣り合わせに生活しているのか、脱原発はもちろん原発のない環境をどう形作っていくべきか、根気よく観る側に解説

する。

### ・住むところではない

私はあの震災が起きて、3.11について何かものを言うなら、やはり現地を訪れる必要があると思ひ、被災地での瓦礫撤去などのボランティアに参加し、2年後に同じ被災者宅を再訪した。親戚が福島にいるため、原発事故については心配が絶えない。地震や津波、原発事故という人災など、現地の被災者の計り知れない苦労を理解できる立場ではないと分かっているつもりでも、自己満足の手助けしかできていないのではないかと多少思うこともある。

しかし特に原発事故による放射能汚染については、生存に適した環境にあつて、安全で健康に生活することがあらゆる人の権利なのだから、「住むところではない」とされる福島県から、人びとを連れ出すことが必要だと思う。そのためにも、福島の人たちや関係者と話をし、どんな将来を描くのか語り合うことが必須だ。そのきっかけとして、この「日本と原発」は大きな一助となる映画だと思う。

### ・第4の革命～自然エネルギーの実力

環境学者の飯田哲也氏は映画の中で、2012年の地球上の総発電量は、風力と太陽光を足すだけで原子力の発電量を追い越したと解説し、90年代から自由で環境保全的なエネルギー分散型社会を実現してきた北欧社会を実際に見てきたから、原発は不要だと断言できると明るく話す。自然エネルギーは「第4の革命」と呼ばれており、エネルギー革命、緑の産業革命、そして地域分散ネットワーク革命という3つの要素からなり、地域にエネルギーと仕事と経済をもたらす——各地で地域主権のエネルギー社会を実現する活動が広まっているという。原発事故後の今の日本、そしてその将来を憂慮してしまうなら、“未来を見て確信した”環境学者の研究に注目し、脱原発とエネルギーシフトの活動を全国で実行に移すことが最善だと思った。

(M.A.)

### ■時が経つほどに、参照されるだろう映画

4回目の3月が来た。3年前は、東日本大震災とそれに伴う原発事故をめぐる日本社会のありように、この国の問題がすべて凝縮している、と戦慄した。今はどうか。刻一刻と変化し「復興」のなかにある街と復旧さえままならない地域、人も土地もさまざまな状況が同時進行していくなかで、被災地(と括っていいだろう

か?)の「いま」を具体的にイメージすることが難しくなった。岩手・宮城・福島の3県でいまだ約9万人が仮設住宅で暮らし(NHK時事公論)、約22万9000人が「避難者等」として生活しているというのに(復興庁HP)。

そんなとき、映画「日本と原発」を観た。監督はバブル期に企業法務で鳴らし、その後原発の問題に取り組むようになった弁護士・河合弘之氏。

原発事故はどのように起きたのか? 何が問題だったのか? なぜ事実が報道されないのか? 本当に原発は安価なのか? 原子力規制委は3.11をどのような教訓としたのか? どのようなエネルギー政策があり得るのか? ……原発の問題点をひとつひとつ、事実を積み上げながら検証していく。そして、これまでひとつひとつ、原発を再稼働したい人々の主張に、いねいに反論していく。

難解さは、ない。それは、河合弁護士らが人々に話を聞きながら、一緒に学んでいくスタイルを取っているからだ。国内・国外のインタビューや独自の現地調査などに加え、ニュース映像・音声・資料などもかなり使用されており、現時点での、日本が原発をすべて廃止しなければならない説明がきちんとまとめられている。

まるで弁論のよう。この映画は、観た者それぞれが、同じ説得力をもって他人に語りかけることのできる参照元としての役割を担うように作られているのではないだろうか。さらにこれは、これから5年、10年、30年と時間がめぐっても、長く参照できるものだ。それは、順を追った丁寧な説明によるところも大きい。人間が怒りを語る映画でもあるからだ。記憶は薄らぐ、変質もする。でも信頼できる参照元＝記録を持った記憶は強い。(AT)

---

### 映画『日本と原発』

製作・監督／河合弘之 構成・監修／海渡雄一  
制作協力／木村結 音楽／新垣隆

上映時間：2時間15分／制作年：2014年

制作国：日本／制作：Kプロジェクト

公式ホームページ <http://www.nihontogenpatsu.com>

## ■■■死刑について考える“死刑映画週間”鑑賞レポート■■■

2月14日から2月20日まで「死刑映画週間」と題し、渋谷ユーロスペースで死刑について考える映画が期間中計8本上映された。開催が4回目を迎えた同上映会の今年のテーマは「人は人を裁けるのか」。以下私が鑑賞した2本の映画についてレポートする。

### ■戦争と死刑

今年には日本の敗戦から70年ということもあり、私が見た2作は戦争と関連付ける映画だった。「私は貝になりたい」(主演:フランキー堺、1959年、東宝)は戦時中、上官の米兵捕虜を銃剣で突き刺す命令に従った主人公がBC級戦犯として捕まり、死刑判決を下される物語だ。「俺は上官の命令でやったんだ。だから俺だけは絶対無罪になるはずだ…。獄中で自らを鼓舞し、天皇陛下に恩赦を求め続けるもついに刑執行の日が来てしまう。「深い海の貝ならば、戦争もない、兵隊もない…また生まれ変われるのなら…私は貝になりたい」。刑執行直前の最後の家族へ向けた手紙の朗読は今でも耳に残る。「軍旗はためく下に」(主演:左幸子、1972年、東宝)は戦死した夫の死の真相を追い求め、戦時中夫と同じ部隊で戦い生き残った人を探し出し、真実を聞き出す物語だ。一人ひとりの話は戦時中のリアリティある映像とともに目の前に迫ってくる。戦争という極限下での人間の酷さ(同じ部隊に属していた仲間を殺し、飢えをしのご場面など)を表したシーンは今でも脳裏に焼き付いている。物語後半、時代は高度経済成長期を背景

に映し出す。工事が着々と進み、高速道路や高層ビルが林立していく一方、主人公が取り残されていくコントラストはとても印象的だった。軍国化に突き進む手段として経済政策を前面に持ち出し、かつて犯した過ちの記憶を人々から消し去ろうとする現政権の姿と重なった。

### ■私事わたくしごとの問題として考える映画と「言葉の力」

私は学生時代から死刑や戦争の問題について勉強してきたつもりだった。しかし、それは教科書を閉じたその瞬間、議論を終えたその瞬間に私の日々の生活とは関係のないどこか遠い問題になってしまっていた。それらの問題についてはあくまで外から論じ、批評するにとどまっていたのだ。私は言葉として「死刑廃止」、「平和」、「戦争反対」などと謳っていた。確かにそれらには辞書に載っているような意味はあるだろう。だが、人々の心を揺さぶる言葉を発していたのか、自問せざるを得ない。今回鑑賞した映画には先のような言葉は出てこなかったが、リアリティある映像が鑑賞後も私の心に残り続ける。それはもはや遠いどこかの問題ではなく、私事の問題として日々の生活の中で考えるきっかけを与えてくれる。

東日本大震災から4年、日本の敗戦から70年を迎える中、風化の著しさを日々痛感する。情報が夥しく流れてくる中で「言葉の力」を再考することこそ、風化を押しとどめるヒントになるのではないか。今回の映画のように人々の心に直接訴えかける言葉を紡ぐ努力をしていきたい。(M.N.)

【編集後記】▼「日本と原発」は各地で上映会を予定しています。ぜひ鑑賞していただきたいと思います。  
▼アメリカのユタ州が、死刑執行の際に使用する薬物の調達が出来なかった場合に備えて、銃殺刑を復活させた。処刑方法ではなく、命を奪う人権侵害として死刑制度を問題にすべきだと改めて思った。(望)